

球磨川 Safety Kid's Labo.について

八代河川国道事務所人吉出張所 ◎上水樽 昌幸
○小柳 敬資
筑後川河川事務所工務第一課 ●野呂 健志

1 はじめに

一級河川球磨川は、熊本県球磨郡水上村を源流とし、球磨盆地、人吉市街部を経由し、八代平野から八代海へと注いでいる。その球磨川は、“日本三大急流”の一つにも数えられる河川であり、古くから米などの農作物の栽培のための水利用や人吉球磨地域で産出された木材を運び出すための水運などに利用されてきた。またその景観・文化的観点から、平成27年には、文化庁により「日本遺産」の第1弾に熊本県内で唯一登録された「相良 700 年が生んだ保守と進取の文化 ～日本でもっとも豊かな隠れ里一人吉球磨～」の構成資産となっている。

その球磨川が、九州の他の河川と異なる特徴の一つが、レジャーやアクティビティとしての利用が非常に多いことである。明治時代より行われ、現在は人吉市の第三セクターにより運営されている「くま川下り」、毎年6月に解禁され人吉市内でも多くの釣り客を見ることが出来る「鮎釣り」、また、ここ10年で爆発的に利用者が増加している「ラフティング」。この他、「川遊び」など様々な河川利用が行われている。これは、先述の急流という河川の特性と“日本一の清流”と言われる川辺川を支川に持つことが要因と考えられる。またこうした利用以外にも、川辺では散歩やジョギング、水面では高校生によるカヌーの練習などに利用されている。

その一方で河川利用者による事故や怪我也も発生している。平成26年7月には球磨川上流部の球磨郡多良木町で、川遊びをしていた子どもが溺れ、それを助けようとした両親が亡くなるという事故も発生している。この事故をうけて、人吉球磨地域の一部の小学校では学校側から児童に対して改めて「川に近づかないように」という指導も行われたという。

確かに河川の危険な箇所に入り込んだり、大雨で増水している時に川に興味本位で近づくなどの行為については河川管理者として注意・指導していかなくてはならないことであり、普段からの河川管理業務においても、河川に潜む危険については特段の注意を払い、それを周辺住民や利用者へ喚起していかなければならない。しかしその一方で、必要以上に「川は危ない場所、忌避する場所」というイメージが作られて、地域の人から遠ざけられる存在になるのも河川管理者として課題となる。

こうした河川管理者の思いと、この地域で生まれ育ち、球磨川とともに生活してきた人の中に球磨川への思いを持った者たちが協同して、子どもが川で遊ぶ時にライフジャケットを着用し“川で楽しく、安全に遊ぶ”ことを広く普及・啓発させるために立ち上げたのが、この“球磨川 Safety Kid's Labo.”というプロジェクトである。

2 プロジェクトの目指すもの

この“球磨川 Safety Kid’s Labo.”は、官民一体となったプロジェクトであるため、国土交通省だけではなく、人吉球磨地域に詳しい河川情報モニターで川漁師の会長をはじめ、ラフティング関係者、教育関係者、経営者、マスコミ関係者など様々な仕事に携わり、経験を持つメンバーで構成され、プロジェクトの目標として、ライフジャケット着用推進を目指していくことにしている。

プロジェクトが発足した平成26年2月に活動を開始するにあたり、まずは川遊びでのライフジャケットの着用を普及するための方策として、以下の4つのことが決められた。

- ① 八代河川国道事務所にある約140着のライフジャケットを無償貸出する。
- ② ただライフジャケットを着けてもらうだけではなく、正しいライフジャケットの装着方法を教える。
- ③ 川での安全で楽しい遊び方と危険な箇所を教える。
- ④ 教える対象は子供だけではなく、親子とする。

これらの方策から、さらに検討を行い

- ライフジャケット無償貸出の周知する
- 学校を対象とした小中学生と教師のための川の安全教室を実施する。
- 川遊びのルール、危険箇所、楽しい場所を示した『川遊びマップ』を作成する。
- 単なる堅苦しい講習ではなく、楽しく学べる『祭り』のような親子イベントを実施する。

以上の4つの具体的な活動に取り組むことになった。

このうち、これまでに実施しているものについて、まず紹介する。



レジャーの盛んな球磨川



プロジェクト会議

3 現在取り組んでいること

まず、第1に「ライフジャケット」の無償貸出について、人吉出張所ではライフジャケットを大人用子ども用合わせて約50着、また川遊び専用のヘルメットも保有している。普段は、地元の小学校等を対象にした水生生物調査などで使用してい

るが、このライフジャケット及びヘルメットを川で遊ぶ時に使用したい希望者には、氏名、住所、使用する期間、目的等を届出用紙に書いてもらえば、無償で貸し出している。この無償貸出では、地元の小学校での環境学習や地元で毎年開催されている東北の震災被災地から子どもを招待するイベント開催の際には毎回借りに来る関係者もいる。しかしながら、貸出をしていることが一般には知られていないため、ここ2年の利用が延べ30～50着程度であった。そこで、平成27年8月には、地元の月刊情報誌に無償で貸出していることをアピールするページを設けてもらった。購入すればそれなりの金額がかかり、1回限りの遊びではライフジャケットを購入してまでは・・・という人にもこれを機会に借りてもらい、ライフジャケットの効果を実感してもらいたいと考えている。

第2に「学校を対象として小中学生と教師のための川の安全教室」についてであるが、先述のように平成26年に発生した水難事故の後、地域の一部の学校では児童に対して改めて「川は危険なので近づかないように」という指導が行われたという。しかし、ライフジャケットを着用すれば、万が一深いところに入っても体が浮き上がることにより、溺れてしまう危険性は低くなり、それによって救助できる可能性も高くなることはあまり知られていない。それは実際にライフジャケットを着てみないと実感できない。そうしたことを、川で遊ぶ子どもはもちろん、教職員にも知ってほしいという思いから、この安全教室を開始した。

平成27年は、人吉球磨地域の4つの小学校で安全教室を行い、参加した児童は80人以上であった。講師は、地元でラフティングのインストラクターを行っているメンバーなどで、最初は、体育館において、ライフジャケットの着用方法を説明し、川で遊ぶ時の注意点や救助の求め方などを指導した。後半はプールで実際にライフジャケットを着用してもらい、水の中で浮くことや、スローロープを使った救助方法を体験してもらった。児童たちは、初めてライフジャケットを着用する者が多く、最初は戸惑っていたが、水の中でも正しい姿勢を取れば必ず浮き上がるライフジャケットの効果を実感していた。この安全教室の様子は、地元新聞にも掲載された。



無償貸出しているライフジャケット



小学校での安全教室

4 今後計画していること

次に今後計画している取り組みについて紹介する。

まず「川遊びのルール、危険箇所、楽しい場所を示した『川遊びマップ』」の作成である。川で安全に遊ぶためには、ライフジャケットという装備以外にも守るべきルールや安全な場所あるいは危険な場所についての知識も必要である。そうしたことを川遊びをする者が一目でわかるように考えたのが、『川遊びマップ』である。球磨川管内では、古くから子どもたちが川遊びをする場所として、“天然プール”があった。流れが急でなく、深みも少ない場所にロープで区切ってそこで遊泳をし、雨が降って増水しそうな時は直ちに監視役の大人が川から出るようにして事故がないようにしていたという。そうした場所は、昭和40年代ごろを最後に無くなっていったというが、地元の子どもの間では、今でも親や祖父母の代から教えられてきた川遊びの場所がある。特に川辺川では、現在でも川遊びが盛んで、いくつかの場所では、夏休みには遊泳者が見られる。そうした場所で安全なところを紹介し、その場所にあった安全な遊び方、基本的な川でのルールを記載したマップを作成したいと考えている。現在は、相良村内の川辺川の中で、まず1箇所選定して具体的にどういった内容を記載しようか検討している段階である。

次に「楽しく学べる『祭り』のような親子イベント」の実施について。プロジェクトでは、人吉球磨地域の子どもの親に対して、川でのイベントを開催したいと考えている。先述の「学校での学生と教師のための川の安全教育」以外に考えているものである。学校で教職員にも教えたとしても、実際に子どもが川で遊ぶ時に一緒にいることが多いと思われるのが、親などの保護者である。平成26年の水難事故でも溺れた子どもを助けようとして、その両親が亡くなるという事例からもわかるとおり、親も安全な遊び方と救助の方法を理解していないことには、こうした事故が無くならないだろう。そうしたことから、親子一緒になってライフジャケットの着用方法・重要性を理解してもらい、川での安全な遊び方を学べるイベントを開催したいと考えている。ただ、それも堅苦しいものではなく地元の夏祭りにブースを作って、楽しみながら学べるようなものが今夏できないか、現在自治体や関係団体に働きかけて検討しているところである。

5 おわりに

最後に、この地域で河川管理に携わる者として、昔のように川遊びが盛んになり、現在行われているレジャー・アクティビティも含めて、地域住民や観光客にとって魅力ある球磨川にしていきたい。

その一助となるために、ライフジャケットという装備を一人でも多くの人に有効性を周知して、実際に着用してもらいたいと考えている。そのことにより、不慮の事故を無くし、川で“安全に楽しめる”ということを提供していきたい。その目標のために、このプロジェクトでは、今後も学校や行政機関と協同して取り組みを進めていき、ライフジャケット着用の啓発活動を進めていきたいと考えている。